
貴方の青春を教えてください

帆立レノン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

貴方の青春を教えてください

【Nコード】

N51290

【作者名】

帆立レノン

【あらすじ】

「貴方の青春を教えてください」

仕事の失敗で全てを失った『わたし』は、失意の中さ迷う内にとある旅館にたどり着く。

『白雲旅館』そこで出会う女将『しぐれ』を始めとした不思議な少女達。彼女達は自分達を『終わった者』達と呼び

純粹無垢な彼女達との出会いは『わたし』に何をもたらすのか……

「貴方の青春を教えてください」

もし、人生のどん底があるとすれば、まさしく今であろう。
何処と知らぬ場所でわたしは立ち尽くしていた。

わたしの転落は有りがちなものだ。会社でそこその立場で、大切な仕事で大ポ力をやらかしてしまった。金を何とか工面しようとしたが、結局それは借金を増やす事となった。

結果としてわたしは、会社には居られず退社した。
家も失い、残ったのは借金だけ……いや絶望も残ったか。

だからと言って自殺する勇氣はなく、少ない路銀で場所を転々としていた。

するといつの間にか、田舎に着いていた。

名前も聞いた事も無い地名だ。

一体何処まで来てしまったのだろうか……

駅を降りると、田んぼが広々と続き、緑が美しい山も見えた。

のんびりとした雰囲気はわたしの心を一瞬癒すが、それは本当に

一瞬。再び、自己嫌悪に囚われる。

同僚や上司の顔が思い浮かぶ

。

オマエナンテイナケレバ。

わたしは一体何の為に生きて来たんだろう？

わたしに生きている価値はあるんだろうか？

……死のう。

わたしはこの時確かに決断した。死んでしまえば今より遙かにマシな筈だ。山には崖ぐらいあるだろう。そこから落ちて死のう。

死ぬならこう言う場所が良い。山を目指し、長閑な田舎道を歩きながらそんな物騒な事を考えていた。わたしは山登りをし始めた。スーツ姿で山登りをする姿は他人から見れば、滑稽だろう。

暫く歩く、道無き獣道。スーツが汚れるが気にしない。

それなりに年季の入ったスーツだ。

第一、どうせ死ぬなら関係無い。

歩く。ただひたすら。適当に歩き続ければ、いずれ崖に着くかと思っていたが……そんな都合の良い場所はない。

すると奇妙な建物が見えてきた。こんな山奥に何が、と思い近付くと、

『ようこそ！白雲旅館へ』

と恐らく手書きで書かれたと思われる看板の文字が見えた。どうしてこんな山奥に旅館が？

疑問に思いながら、眺めていると、

「いらっしやいませ！ようこそ白雲旅館へ！」

唐突に響いた若い女の声にわたしは驚く。

正面に視界を移すと、女の子が立っていた。

純粹無垢そうな大きな瞳に、長い美しい髪。柔らかい優しい印象を受ける女の子だった。まだ、16歳くらいの女の子が和服、つまり仲居の格好をして立っていた。

思わずわたしは見惚れていた。

「お客さん……ですよね？」

少女の問い掛けでわたしは正気に戻る。

違うと否定する前に、

「ささつ。こちらにどうぞ！」

腕を引かれ旅館に入る。和風なエントランスは予想外に広く、清潔だった。

「一泊で宜しいですよねっ？」

いや……わたしは今文無しなのだ。とてもでは無いが、宿泊代など払える筈が無い。

わたしはそう言ったが、

「それなら、お代は結構ですよ！ごゆっくりして行って下さいね？」

一体……どう言う旅館なのだろうか？わたしが驚いていると……

「もしかして、泊まるの嫌ですか？」

泣きそうになった少女の顔を見ると、断る事なんて出来なかった。そもそも断る理由も見つからないし……

「はいっ！私は『しぐれ』っていいいます。お客さんのお世話をさせていただく、女将です」

再び、驚く。こんな少女に女将を任せているとは……

ここの経営者は一体何を考えているのだろうか？

金持ちの道楽なのかも知れない。良い身分だ。

「では、お部屋にご案内させていただきます」

泣き顔から一転して満面の笑顔。部屋に案内と言う事で、彼女の後を着いていく。

途中、

「いらっしやいませ！」

「……ませ」

「珍しいですね！」

「……若いね」

様々な仲居さんに声をかけられた。仲居さんに共通するのは皆少女だった。

見かけで言えば女将のしぐれが1番年上に見える。

皆若いと言うのに何故こんな山奥の旅館で働いているのだろうか？するとしぐれは、少し複雑そうな表情をして、

「……私達は『終わった者』達ですから。他に行く当てが無いんです」

そんな回答。わたしに意味が分からず、首を傾げているしかなかった。

「あつ。ごめんなさい。気にしないで下さい。ささっ着きましたよ」
疑問に思いつつも案内された部屋に入る。畳の敷かれた綺麗な和風の部屋だ。テレビなどは無いがクローゼットなど家具も置いてありちゃんとした旅館の客室だった。

カーテンは閉められていて、景色は見れない。

「今、開けますね」

しぐれがカーテンを開けた。

光りが部屋に降り注ぐ。景色が視界に入り

呼吸が止まった。

とても美しい。

言葉には表せない、それは美しい景色が広がっていた。

見渡す限りの木々が織り成す緑、鳥達が飛び交いそれを強調させている。

わたしにも純粹に自然を美しいと思える感情が残っていたのか。

「綺麗ですか？」

綺麗だ。わたしは正直にそう答えた。

「夏は緑がとっても綺麗なんです。秋は紅葉が凄く綺麗なんですよ」
しぐれの説明を聞きながら、わたしは目の前の景色に魅入っていた。

なんて壮大さだ……わたしの悩みなんてくだらなく感じてしまう。

「綺麗な景色を見て、美味しい物を食べるのが一番疲れを癒やせるんですよ。簡単な事なんですけど……忘れがちなんです」

会社の窓から見る景色はただビルがそびえ立つだけだ。家から見る景色も酷いものだ。

「……お客さん。よかつたらでいいです」

……

「とっても疲れた顔してます……何かあったのか話をして下さい。それで少しでも楽になれるなら……」

……ああ……わ、たしは……
口は走り出すと止まらなかつた。会社で失敗した事……辞めた事……
……そして……

わたし何か……死んだ方が良いんだ……

ばちん。

甲高い音が響いた。

頬が熱い。

驚いて正面を向くと涙を浮かべ、怒った表情をしたしぐれ。

「何て事言っんですかぁー!!」

そこでやっと……叩かれのたと気付く。

「どうしてそんな簡単に死ぬだなんて言っんですか!?!」

しぐれは猛烈に怒っているようだ。

彼女がどうしてそこまで、怒るのか分からないけど……

「駄目ですよ!口にしても思っても!」

でもこれだけは、はつきり解る。

しぐれはわたしの為に怒っているのだと。

「いいですか!お客さん……っであれ?」

知らずわたしは涙を流していた。こんな……どうしようもないわ

たしに本気で怒って、そして思ってくれる人が居る……そう思うと

……熱い気持ちが増える。長らく忘れていた想いが……

「は、はわわ……!ご、ごめんなさい!泣く程痛かったですか!?!」

慌てふためくしぐれ。その様子を見てみると自然と笑みが浮かんで
いた。

わたしは、そんな事はないと言った。

「……本当にごめんなさい……お客さんを叩いちゃうなんて……」

いや……よく効いたよ。ありがとう。
そう言ってわたしはしぐれの頭を撫でる。

「……………ふえ？」
怒鳴られとても思っていたのか、頭に手を当てた時はびくっとしたが、素直に受け入れてくれた。

「……………えへへ」
屈託無く、笑うしぐれ。

娘が居たら……こんな感じなんだろうか？

「……………駄目ですよ」

わたしに頭を撫でられながら、悲しそうな、本当に悲しそうにまるで自分の事のように、そう……しぐれは呟いた。

「死んじゃ……………」

分かってる……分かってるよ。

わたしなんか死んでも悲しむ人が目の前に居るんだ。

死ねる……もんか。

「……………そろそろ。飯なんだけど？」

少年のような声が部屋に響いた。驚いて、入口を見ると白い髪の毛の子が立っていた。

「……………はう！しろ君いつの間に！」

「ちよっと前だけど……邪魔だったか？」

「ち、違います！そんなんじゃないです」

「冗談だつて。どうせ、人生相談でもしてたんだろ。ほら、そのの奴も飯だぞ」

無礼極まり無い態度だったけど、不思議と腹は立たなかった。

「失礼ですよ！しろ君！お客さまなんですよ！」

「知るかよ。オレは飯作るだけだ。接客はアンタの仕事だろ？」

「しろくん……！」

何やら口喧嘩を始める二人。何やらとても微笑ましい光景だ。

「上司の言う事は絶対なんです！」

「いつからアンタが上司になったんだよ……」

「じ、じゃあ私の方が歳も上です。お姉ちゃんの言うことは絶対な
のです」

「あれ？アンタ何歳だっけ？」

「23歳ですよ？」

「……マジ？」

……わたしも彼に同意だ。

「え？え、え？何でそんなに驚くんですかあ？ああ！お客さんまで
え！」

「……俺より5つよりも年上……」

……駄目だ。信じられない。誰がどうみても高校1年くら
いにしか見えない。

「……な、何か釈然としませんが……とにかく、しろ君解りました
か！」

「……はいはい。とにかく飯が冷める。もう『李の間』に料理並
べてあるんだからな」

「確かにそれは大変です。行きましようお客さん」

……世の中とは不思議なものだ。

『李の間』と言う広間に案内された。

並べられている料理は和風……つみれ汁や鰯の開き、鯛の尾頭付
きの刺身に山菜のご飯。どちらかと言うと素朴な感じだ。

「アンタ見た感じこーゆうのが好きそうだったからな」

わたしは確かに豪華なモノよりこの方が落ち着く。

早速一口頂く。

「……おいしい。田舎を思い出す優しい味だ。」

じつとこちらを見ているしろと呼ばれていた少年。

おいしいと彼に伝えると。

「……！当たり前だろ。俺が作ったんだからな」

そっぽを向くしろ君。少しだけ嬉しそうな顔だった。

食事が終わると温泉に案内された。湯加減も最高でこの世かもしれない。

浴衣に着替えわたしは部屋でのんびりしていた。こうしてのんびり出来たのは何年ぶりだろうか……

「失礼します」

そう言いながら部屋にしぐれが入ってきた。

いやしぐれだけではなく他の仲居さんも入ってくる。

一体なんだろう？

「あの……お願いがあるんです」

お願い？何だろうか……無理な事以外なら何でも聞いてあげたいけど……

「はい……」

少し溜めて、

「貴方の青春を教えてください」

そうしぐれ言った。

青春……？

「はい。貴方の過ごしてきた時を……青春を教えてくださいなんです」

わたしの青春……そんな特別な事していない。ありふれた事だと思ふ。それでも良いのだろうか？

「……はい。それでもいいですよ」

わたしは……

高校時代わたしは文科系の部活しかやっていなかった。ほとぼしる汗だとか……熱い友情とか……そういった事は無かった。勉強して、友達とか話して……それだけだった。

「でも……楽しかったんですね？」

……そうか。

ありふれて、退屈で、輝いてる訳じゃないけど……楽しかった。それだけは事実だ。

それがあってわたしは今ここに居る。どうして忘れていたのだろう……

今を生きている。

わたしはここにいます。

辛い時があっても友達がいる。辛い事があっても明日良い事がある。そうしてきた高校生活……今だってそれは変わらない筈だったのだ。わたしがただ……忘れていただけだったんだ。それなら……わたしは生きていける。簡単な……事だったんだ。

「お話……ありがとうございました。お客様」
礼を言うのはこっちだ

ありがとう。

「……！」
何故かしぐれは驚いた表情をし、それから満面の微笑みを浮かべて、

「はいっ。それではおやすみなさい」

そう言っつて部屋から出ていった。

一体………？

しぐれに次いで他の仲居さんも出ていく。最後はしろ君。

「何だ。アンタ……」

ふっと………笑い、

「笑えるじゃん」

しろ君はそう言い出ていった。自分では分からない程自然にわたしは笑っていたのだろう。

布団に潜ってすぐわたしは寝てしまった

信じられない程よく寝た後、とうとうチェックアウトの時が来た。もう一泊出来ないかとしぐれに聞いてみる。

「……規則で一泊しか出来ないんです。ごめんなさい」

しぐれは複雑そうな顔をしてそう答た。少し残念だった。しぐれがそんな顔をすると言う事は本音に無理なのだろう。

見送りは全員居た。奥の方にはしる君も居た。

「……お客さん……三つ約束して下さい」

何だろう？全て守りたいけど……

「一つはこの旅館は誰にも話さないで下さい」

……分かった。

「二つ目は帰る時は絶対に振り向かないで下さい」

……分かった。

「最後に……時々でいいです。私達の事、思い出して下さい。それだけで……私達は満足ですから」

分かった。絶対に忘れない。きつと一生覚えてる。

「はい！それではお帰りにお気をつけて。白雲旅館にお越しくださいますし、ありがとうございます」

『ありがとうございます』

わたしは手を振り、背をむけた。

温かい場所だった。こんな場所があるなら世の中捨てたモノじゃない。いや……わたしが捨てただけで、実はありふれたモノなのかも知れない。

彼女達はきつとそのありふれた事さえ出来なかったのかもかもしれない。

だからあんなにも怒ったのだろう。

だからわたしに青春の事を聞いたのだろう。

だから優しかったのだろう。

その痛みを知っているから。

わたし振り向かない。約束したから。

きつと二度と逢えないと知っていても。

約束だから。

気がつくとなわたしは電車に乗っていた。

目的地はわたしの地元だ。一度里帰りを決めたのだ。

そうしたら、やり直せると思うから。

「ありがとう。しぐね。わたしは大切な事……思い出させたよ」
どう致しまして。

しぐねのそんな声が聞こえてきそうだった。

(後書き)

10月。皆さんが本格的に就職活動や進学に動き出す時期ですね)
決まった方も居るでしょうけど)

そんな忙しい時の息抜きは必要だと思います。一度立ち止まって気
楽に考えて見て下さい。思い詰めて良い事は無いですから。楽しい
事も世の中多いです。ゲームとか、ゲームとか、ゲームとか。……
駄目人間でごめんなさい。

短編でしたけど、ここまで読んでいただきありがとうございます。少
しでも心に残って貰えば嬉しいです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5129o/>

貴方の青春を教えてください

2010年12月9日18時10分発行